

# わいわいサロンかなざわ応援隊

団体名●わいわいサロン応援隊／代表者名●三好伸子（人間科学部こども学科・教授）

## はじめに(背景・目的・目標)

星稜大学の学生有志が金沢市中央公民館で開催されている【わいわいサロンさかなざわ】に参加しました。この活動は、令和6年能登半島地震による精神的な負担や、避難先である金沢市での一人暮らしによるストレスを抱える高齢者に対して、精神的な癒しとリラクゼーション効果を提供し、他者との交流機会を創出するとともに、生活意欲の向上を図ることを目的としています。

## 活動内容

2025年4月から2026年1月までに全8回実施しました。毎回、参加者の希望を聞き、学生が企画、準備をしました。

- 4月 苔玉づくり
- 5月 防災クッキング
- 6月 Tシャツアート
- 7月 たこやきクッキング(祭りに向けた準備)
- 9月 龍國寺において祭りに参加
- 11月 クリスマスカード作り
- 12月 お正月飾り作り
- 1月 毛糸でポンポン作り

## 成果、結果の考察

令和6年能登半島地震から2年を迎えようとする時期となり、参加者と学生が心を通わせる大切な節目となる日がしばしばありました。本サロンは、能登半島地震による環境の変化や孤立感に直面する高齢者の精神的ケアを目的として継続されてきましたが、時の経過とともに参加者の転居や体調の変化といった事情が重なり、参加者が減少していきました。

最終回では、少人数ながらもこれまでの活動の一つひとつ慈しむように振り返る時間が持たれました。共に制作した苔玉やお正月飾りの思い出を語り合う中で、参加者からは活動の終了を惜しむ声が聞かれた一方、今も自宅で大切に飾っているという報告もあり、本活動が一時的な慰めではなく、日々の生活に彩りと活力を与え続けてきたことが示されました。

対話の途中、故郷である珠洲市の自宅に想いを馳せて涙を流される場面もありましたが、学生が静かに寄り添い、共に手を動かして何かを作る過程で、その表情には次第に穏やかさが戻っていきました。毛糸でポンポンを作った際に見られた完成した飾りを学生の髪に添えるといった微笑ましい交流は、参加者が「支えられる側」という立場を超えて、他者を慈しみ喜ばせるという本来の快活さを取り戻した証でもあります。

転居や体調不良による人数の減少は、被災された方々の生活ステージが変化していることの現れでもあります。このサロンが提供してきた「安心して感情を吐露し、誰かと繋がる」という価値は、参加者の心の中に確かな「癒し」として刻まれました。今年度で活動は幕を閉じますが、学生との交流を通じて得られた自己肯定感と前向きな意欲は、参加者がこれからの新しい生活を歩んでいく上での精神的な礎となったと言えます。



学生に作った飾りを送る参加者

## 今後の課題、展望

震災から時間が経過しても消えない故郷への喪失感に対し、日常の中でふとした瞬間に感情を吐露できるような、長期的な見守り体制のあり方を検討し続ける必要がある。